



Title	草木が語ること : プルースト的想像力の一面
Author(s)	原田, 武
Citation	études françaises. 1983, 19, p. 45-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

草木が語る こと

—プルースト的想像力の一面—

原 田 武

植物の世界がプルーストの想像力の働きのうえで、ことのほか顕著な意味をもつことはたしかである。プルースト的感受性にとって、それは海と並んで重要な位置を占める。よく茂った樹木や愛すべき花々が、微細かつ入念に描き出されるいくつもの場面の美しさもさることながら、問題はさらにこれらとの接触で示される感受性の質が、世界や人間に対するプルーストの見方の、かなりの部分とかかわりをもつところからもくる。本稿は、これらの点をめぐるささやかなノートである。

たとえば、野生のものであれ、人の手で栽培されたものであれ、樹木のたぐいへの関心は、早く『楽しみと日々』や『ジャン・サントゥイユ』の時代からプルーストのものであった。プルースト青年期のみずみずしい情感に浸透された、樹木をめぐる行き届いた描写は、これら二つの作品のあちこちで読者の心を楽しませてくれる。なかでも、1895年8月の日付をもつ『楽しみと日々』所収の小品「森の下生え」を通じて、このころのプルーストにとって、樹木とは何であったかがよく察せられる。ノルマンディ内陸部の、山ぶながうっそうと茂る森のなかに身をおいた作者は、「私たちは、樹木という頑健で平和を愛する種族から恐れることは何もなく、そこから学ぶことが多い」と述べたあと、つぎのようにつづける。

「この種族は私たちのために、強壯剤となるエキスや心を鎮める樹脂をたえまなく作りつづけ、彼らとの魅力あるつきあいのなかで、私たちはこんなにも多くのさわやかな、静かな、閉ざされた時間をすごすのだ。

(……) 私たちの精神は、海辺や野原や水の上とちがって、世界の上に伸びひろがる喜びではなく、世界から切り離された幸せを味わう。そして根こそぎにできない幹たちに四方八方から支えられた精神は、樹木にならって上の方へと身をおどらせる。その間、私たち自身は仰向けに横たわり、乾いた枯葉のなかで天に頭を向けて、深い休息の底から、精神がうれしそうにかかるがると伸び上がっていくのを追うことができる。それは葉むらをかき乱すこともなくどんどん登っていき、ついにはいちばん高い枝に到りつくと、そのやさしい空のふち、さえずる小鳥のそばに身をおちつける。あちこちで、わずかばかりの日だまりが木々の根もとによどむかと思うと、時おり木々は夢みるように枝の先端をこのよどみに浸し、それを金色に染める。他のものはみな、くつろぎ、身じろぎもせず、ほの暗い幸せのなかで口をつぐんでいる。その枝々の広大な供物のなかにすくと身を伸ばし、それでいて安らいで平和なこれらの木々は、奇妙な、だがごく自然な姿によって、優美にささやきながら私たちに誘いかけてくるのだ。私たちの生命とこんなにも違ってはいながら、目に見えないところで汲みつくしようもなく蓄わえられているのかと思える、かくも古くかくも若々しい生命と、私たちが心を通いあわすようにと (……) 」^①

樹木との間で生き物同士の共感をただよわせたような、この豊潤な描写のなかから樹木なるものの特質をいくつもとり出すことができる。樹木とは静けさと休息、母性的な庇護を意味すると同時に、精神を日常世界から隔離しその自由な飛翔を助けるものでもある。またそれは人間とは別種な生命を宿しながらも、その「強壮剤となるエキスや心を鎮める樹脂」を味わわせることによって、人間のなかで空しく失われていく「古く若々しい生命」をもりかえさせることもできる。「影」がプルーストにおいて「光の否定ではなくその裏面であり、光とほとんど同じくらい活動的で輝やかしい特性をもつのだ」(Jean-Pierre Richard)^② ということを考えて、樹木の落とす「影」が精神の深さの問題であることがわかるであろうし、樹

木の一属性である「風」が、同じリチャードによって、「他の世界の使者」であり、「もっとも陰うつなものをも活気づけ、軽やかにする」⁽³⁾ 働きをもつとされているのを考えに入れてもよい。そのほか、上の文にもあるように、樹木が暗い地表に日だまりを作り、茂った葉むろに日ざしを受けることで、日光をきわだたせる効果をもつことも重要であろう。大気の様子にとりわけ敏感であったプルーストにとって、日の光のもつ意味は度外れなほど大きい。暗がりとの対比で見られた日の光の貴重さを、『ジャン・サントゥイユ』の一節でみておこう。「私たちが本当に美しいといえる色、つまり理屈をこねる必要もなく一種の幸せな夢で私たちをみたしてくれる色（……）、それはどんなに貧しい部屋の奥であろうと、影におかれた物体に太陽があたるときの色である」⁽⁴⁾。

樹木が人間の想像力に訴えるこのような意味は、基本的に『失われた時を求めて』においても同一だと考えてよい。ただ、『楽しみと日々』や『ジャン・サントゥイユ』の初期の習作から『失われた時』に目を移すとき、一つの変化が見てとれるように思える。樹木にしても草花にしても、その直接の描写より、ある人物との関連、あるいは人物との密接な重ね合せで描くことが多いと感じられるのだ。決定的な大作に及んで、プルーストの人間観察が多様になり、深さと強度を増していくのかもしれない。人間を植物と等しくおくことで、皮肉・コミック・残酷さなど、何らかの心的雰囲気がかもし出されることが少なくないのだから。『ジャン・サントゥイユ』の主人公が根本のところではオプティミストであり、これといって大きな美的・形而上的な問題につき動かされているのではないという指摘⁽⁵⁾を思いあわせてもよいだろう。これからさきは主として、いわば人間の植物化について考えてみたい。

まず、「心の働きの面で、私たちは自分で思うよりはるか以上に自然法則に依存しているのであり、自分で選んだつもりのさまざまの特性であっ

でも、私たちの精神のうちにあらかじめ蔵されていたのだ。ちょうどある種の隠花植物、何かの禾本科植物のように」(I. 892) とか、「人間たちの各世代は植物の一つの種のように自分たちの性格を維持するのだ」(II, 821) といういい方で代表される「人間相手の植物採集家」「精神的植物学者」(II, 628) 的な姿勢は、たしかにプルーストの特徴的な一面である。

「花が散ってさまざまな時期に実を結ぶ植物を眺めるように、私はこのバルベックの海岸で、何人もの老婦人のなかに、私の女友だちのだれもがいつしかそうなるであろう、あの固い種子、あの柔かい塊茎を見たのであった」(I, 892)

「彼女[アルベルチヌ]の頬の色は、シクラメンのような紫がかったばら色に達することがあった。またときには、彼女が上気して熱のあるときなど、病人に似た顔つきを思わせるのだった。そんなとき、私の欲望をさらに肉感的なものに引き下げ、また彼女のまなざしに何かしらもっと頹廢的で不健康な表情をつけ加えて、その頬の色は、ほとんど黒といってよい赤色をおびたある種のばらのもつ、暗い緋色に移り変わるものであった」(I, 947)

プルーストはここで、珍奇な植物を前にした植物学者のように、人間の社会性を抜きとり、個人のもろもろの特性を、まるでその個人に属さない単なる物体であるかのように、観察し分類しようとしている。いわば「科学的」な冷酷さと、一抹の諧謔と、奇妙な美しさがこもごも感じられる描写である。こういった人間の植物化はまた、現象的なものを基本的な「型」に還元するという、プルーストの普遍化への傾向とも結びつくであろう。この点は、彼の決定論なペシミズムとも無関係ではない。それに、上例のアルベルチヌの場合のように、この種の描写がエロチスムに境を接することも、ここでたしかめておきたい。エロチスムとは、本来対象の社会的・精神的な人格を除き去ったなかで、相手を「物」のようにとらえるところに成り立つのであろうから。

人間が植物の姿をとること、これは観点をかえれば、人間をその「土地」とともに息づくものとし、いわば一種の「土地の産物」とみる見方でもある。「フランス中央部の高い山のふもと、小川と急流のふちで生まれた彼女たちは、(……) その自然を保持してきたかのようだ」(Ⅰ, 846) とは、バルベックのホテルで知りあった、客に仕える二人の侍女 (courrières) の物腰や言葉づかいについて述べられた観察である。この種の「[血液が人間にあった原始の海の要素の残存であるとすれば] セレストのうちには (……) 彼女の土地の小川のリズムが残っていた」(Ⅱ, 850) という感じ方がプルーストにおいてどれほどの意味をもつかを知ろうとすれば、小説のなかでコンブレのもつ重要さをかえりみるだけで十分であろう。話者の心が帰っていく中心であり、ある意味で彼の芸術創造の出発点でもあるコンブレの土地は、物語がパリに移ってからでも、深いところで小説を去ることがない。コンブレのさんざしの後ろから姿を現わすジルベルトはむしろとして、周囲に光暈のようにバルベックの海をしたがえたアルベルチヌですらコンブレ的精神の結晶である「サン・タンドレ・デ・シャン教会の彫像の体現者の一人」(Ⅱ, 367) として見られることを思うと、もともとコンブレの領主の子孫であるゲルマント公爵夫人のなかに古いコンブレのおもかげが透けて見えるのは、ごく自然であろう。この、今ではすっかりパリの社交界に君臨する貴婦人の眼や声のなかに、話者はコンブレの自然の多くを認め (Ⅱ, 494)、彼女のうちに「コンブレ近在の貴族の、残酷な娘のもつ活力や魅力」(Ⅱ, 503) が馴化された形で宿っているのに気づくのである。プルーストにおいて、人間は土地と完全に切り離すことのできない存在、多少とも植物のように土地に根をもつ存在なのだ。

しかし、この小説のなかでの人間と植物とのかかわりをさぐるためには、問題を女性に限定することがとりわけ有効であると思われる。これまでみた実例のほとんどがすでに女性にかかわっていた。女性と植物、とくに草

花との結びつきはそれ自身はなほだ平凡ではあるけれども、プルーストの場合の検討から、愛なるもの働きや現実認識の質について、若干の示唆がえられるように思う。いくつかの場合に分けて考えてみたい。

はじめに、プルーストによくある状況の設定として、行きずりの娘に話者がふと心を動かす場合をみよう。このとき娘はよく土地の景物のように見られ、バルベックの郊外をヴィルパリジ夫人の馬車で行くくんだり（Ⅱ，712-715）では、道の両側を通る土地の娘たちは坂道に咲く野生の花だと形容される。上にみた博物学的観察の一変種ともいうべき、ささやかなケースではあるが、ここにプルースト的愛がもつ主観性の一つの極端な形をみることもできるであろう。つまり、ここで娘たちは、話者から見られるばかりでほとんど実体をもたないという点でも、ますます植物なのだ。話者の視線は娘の表面をかすめるのにすぎず、彼の一方的な思いは彼女の実体に何のかかわりもない。「私は暗黙のうちにそれが幻影であることを認めていた」（Ⅰ，715）と彼はいう。花といういわば実質を伴わない美をめぐる鑑賞家にも似て、彼はまぼろしに近い通りがかりの女に対して、想像上の支配者なのだ。

同じ想像上の営みであっても、「コンブレ」の章にあるルーサンヴィルの森の場面（Ⅰ，156-158）になると、想像力の働きははるかに強さを増す。ひとりで散歩を楽しむ話者は、この森にはいって土地の娘の出現をほげしく願う。娘が現われることによって周囲の森が一層魅力を加えるとともに、この木々の美しさが、それがなければ狭くなりすぎたかもしれない女の美しさをどんどんひろげてくれるように思えるのであった。しかも、バルベック近郊の場合、対象となる女の「実体」はまったく問題にならなかったのに反して、ここではそれはどうしてもこの「土地」の娘、いわばこの森の精でなければならないとされる。当時の若い話者の感じ方として、「女」はどれも同じとはとても考えられず、土地がそれぞれ特色と個性をおびるのと同じように、女もまた「その土地の必然的で自然な産物」（Ⅰ，

156)と感じられたのである。木々と娘は本質的なところで結びあい、女を通じて「この土地の深い味わい」により深く近づけるのだと話者は思う。

もともと森は女性的なものの連想を伴う内密性の場所であり⁶⁶⁾、肉感の高揚のための格好の舞台であるが、このルーサンヴィルの森の場面で、森と女との相互補完的な関係を通じて「個性」の問題が扱われていることに注意が必要であろう。「自然のただなかでの夢にあっては、習慣の働きが中断され、物事についての私たちの抽象的な概念がわきにおかれるために、私たちは自分が身をおく場所のもつ独自性、個性的な生命を、深い信念で信じるものだ」(Ⅰ, 156)。習慣の中断によって生じた「個性」への意識が、ここに現われるかもしれない娘にも及ぼされるのである。プルーストの芸術論がその基本において個性の問題であることを思うと、この見方はなかなか貴重といわなければならない。日常の社会生活で個性の実感失われやすく、その上プルーストのはなはだしく主観的な恋愛観のおかげで、やがては、女たちは「つねに同じ快楽をもたらす、とりかえのきく道具」(Ⅰ, 157)だというシニックな考えに到りつくのだけれど。今後植物や樹木について考えるのにあたって、このように「森」という自然との接触で個性の意識が高まるとされているのは、とりわけ意味するところが大きい。この場面が、これからあとステルマリア夫人との逢引きを計画するときにも(Ⅱ, 386)、ピュトビュス夫人の小間使を待つときにも(Ⅱ, 754)、何回か思い出され言及されるのをみても、この場面の重要さがわかるであろう⁶⁷⁾。

ルーサンヴィルの森ではかなわなかった娘の出現の願いは、『花咲く乙女たち』のなかの、バルベックの車中のエピソード(Ⅰ, 655-658)で、かなりの程度実現される。夜の明けるころ山間の駅に止まった汽車の方へ、谷間から牛乳売りの娘が近づいて来る場面である。「もしある人間が一つの土地の産物であり、そのなかで土地固有の魅力を味わうことができる存在だとするなら、メゼグリーズの方、ルーサンヴィルの森で私がひと

りさまよっていたとき、あれほど現われてほしいと願った農家の娘よりも、今あの家から出て来るのを見た背の高い娘こそ、まさしくそのような人間であるのにちがいがなかった」(Ⅰ, 655)。話者はこのとき朝日をあびたみずみずしい娘を前にして、生きることへの強い嗜欲を感じる。彼はひきつづいて、人間が日頃いかに自我の表面にしか生きていないか、体験の質的な差異をいかになおざりにしているかについて豊かな思索をめぐらす。話者のこれほどの感動は、むろん個性的な自我の自覚というプルースト美学の核心から来る。しかし、このことの前提として、大地との接触が想像力の覚醒をうながし、日常生活からの離脱を通じて力と健康さの回復につながるという事実もあろう。ジルベルトにはタンソンヴィルの庭園とシャンゼリゼ公園が重なり、アルベルチヌにはいつもバルベックの海がつきまわっている。話者は女たちとのつきあいにおいて、無意識のうちにも自らのたましいを自然と再生の泉にひたすことを願ったのであろうか。

しかし、バルベックへの車中のエピソードはむろん特権的な場合なのであって、女と土地との個性的な結びつきはそれほど容易に実現されるものではない。『ゲルマントの方』の中ほどにあるステルマリア夫人の一件(Ⅱ, 382-387)は、このことの困難さを知った上での行動だともいえよう。彼女とのはじめての逢引を計画した話者は、出会いの舞台として、ブローニュの森の「白鳥の島」を選ぶ。そのころの季節にパリに立ちこめていた霧のおかげで、この島が彼女の故郷であるブルターニュの島のようになるだろう、と彼は夢見る。「ブルターニュの海と霧のふんいきが、これまでつねに私にとって、ステルマリア夫人の青白いシルエットを衣服のようにとり囲んでいたのだから」(Ⅱ, 385)。ここにあるのは、女と土地との結びつきを目指す、いわば人工的な手段である。他のものの力を借りて、その女性に期待する魅力をことさら高めようとする試みである。話者自身が、ちょうど「修道院にはいることができないからというので、せめても女を所有する前に彼女に修道尼の服を着せる」(Ⅱ, 386) 男のよう

だというように。

ステルマリア夫人のケースがことさら舞台の設定を意図したものとしても、ここで目指されている土地と女との魅力の交換、相互補完的な関係については、もう少し考えておく意味があると思う。もともと、一つのものを愛することで、それを取りまく背景や周囲の状況への愛が生じるというのが、プルーストによくある型なのだ。このことのもっとも大規模な例が、アルベルチヌと海とのかかわりである。「私にはことのほか貴重である一連の海に関する印象を、アルベルチヌは身体の周囲にまきつけていた。この娘の二つの頬を通じて、バルベックの海岸全体を接吻することになるのだと私には思われた」(Ⅱ, 363)。「アルベルチヌへの夢がこの上なく苦しく、独占欲にみち、個性的と思えたとしても、そこにすらどんなに大きな海の広がりがある宿されていたことであろう」(Ⅲ, 839)。「ある人に対するもっとも排他的な愛ですら、つねに他のものへの愛である」(Ⅰ, 833) というのがプルーストの考え方であって、特定の対象への愛はまさにその集中のはげしさによって他へ向かうことになる。プルーストのような極端な主観的な愛のかたちにおいては、相手の人間はもはや統一ある人格ではなく、主体の側の「夢」をふんだんにかかえた星雲のようなひろがりをおびてしまうからだ。ここには、人格の解体というきわめてプルースト的なテーマがかかわっている。

問題は一方で、プルーストの現実認識の基本的なあり方としてもとらえられるかもしれない。事物をそれ自身としてだけでなく、その場の状況、他のものとのかかわりを通じて、いわば「反映」としてあらわすのが、その特徴だと思えるからだ。プルーストの印象派的な一面である。エルスチールの画面のなかで、描かれたものがたがいに魅力を交換しあい、ガラスは水と同じくらい透明で流動的、衣服は女をきょうだいのようにおおっているといった姿(Ⅰ, 848)を、ここに思いあわせてもよいだろう。

花と女とのかかわりがいろいろあるなかで、花との一体化をいわば完全

な形でなしとげるのが、のちのスワン夫人、オデットである。彼女は手近の蘭の花に「自然が彼女に与えてくれた優美な思いがけない妹、生き物の段階からいえばこんなに隔たっているものの、洗練された妹」(I, 221)に對するような仕方で語りかける。彼女の居間では花たちがすっかり彼女の生活にとけこんでいるように思えるので、訪れる人は彼女と花との内密の生活をまるで邪魔したかのような、気づまりを感じるほどなのだ(I, 594)。彼女の身づくろいは「庭や森の花よりももっと自然に」五月の大気から生まれてきたとも感じられ(I, 637)、彼女が散歩道に姿をあらわすところは、「正午にしか咲かないこの上なく美しい花」のようだ(I, 636)。このような同一化がきわめて自然と感じられるのは、高級な客の相手をする彼女の「職業」からもくる。社会の中心から外れたところに位置し、人間の欲望に仕えるこの種の女性が、花という自然の存在がもつエロチックな喚起力と容易に結びつきやすいのはむろんである。と同時に、このような職業が当時のブルジョワ社会という高度な文明の所産であることにも関係があらう。花は、とくに人間の手で栽培される花は、自然のものであるとともに、すぐれて進んだ文明の現象であるからだ。花がめでられる環境は、女性の衣裳や化粧が尊ばれる社会と多くの場合重なるものだ。花のもつ多義性を通じて、オデットという女性のあり方がたくみに暗示されているといえよう。

女が植物との重なりあいで見られるこれらいくつかの場合の最後に、アルベルチーナが眠る姿が描かれる、あの有名な個所をぜひともとり上げないわけにはいかない。この場面からは、これまでの場合から進んで、このテーマのもついわば精神的なひろがりへの眺望がえられるように思う。アルベルチーナが眠りに落ち、いわば存在しながらの不在というあり方をとることによって、覚醒時には不可能であった話者の想像力の働きが活発になり、知覚(存在)と想像力(不在)とが二つながら発動する、というのがこの場面の基本的な意味であらう。プルーストが「美を享受するための

唯一の器官」(Ⅲ, 872)と呼ぶ、想像力が加わることによって十全な認識が行なわれるというこの形は、いくらか無意志的記憶による過去の再現を連想させ、存在しかつ不在という、このときのアルベルチーヌのあり方は、思い出された過去が存在しながらも不在であるのと等しい関係に立つように思われる。アルベルチーヌを見つめる話者の、これほどの感動ももっともなのである。

このとき、眠りこんだ娘は生活的な側面をことごとく失いはする。しかし、話者の旺盛に働きはじめた想像力にとっては、むしろそれを失ったことによって、別種の、より純粋な生命を獲得したものとされる。彼女について用いられる草木の比喩は、この凝縮した生命をあらわすものにほかならない。

「眼を閉じ、意識を失うことによって、アルベルチーヌは、私が彼女を知った日以来私を失望させつづけてきた、さまざまの人間的性格をつぎつぎと脱ぎ捨てていた。彼女はもはや、植物の、樹木の無意識な生命によって生かされているのにすぎず、それは私の生命とは違って、より異様でありながらそれでいて一層私に従属するものであった。このとき彼女の自我は、私たちがしゃべっているときのように、表面に出さぬ思考やまなざしという出口からしょっちゅう脱け出ることがなかった。彼女は、外部にもつ自分のものをすべて呼び集め、自らを自分の身体の中に逃げこませ、包みこみ、集約していた」(Ⅲ, 70)

このときの彼女は、概念性と言語を伴わない生命体とでも形容できるであろう。概念的な夾雑物をふくまないもの、言語の媒介を経ないものに、プルーストがどれほどひきつけられたかはいうまでもない。彼が言語に対して抱いていた基本的なところでの不信や、絵画への関心、音楽への深い傾倒を思い出せば十分であろう。プルーストの芸術創造は、かなりの部分、言語を非言語的に機能させるところに成り立つともいえるのである。

概念性を遠ざけるということ、このことは一方で、現実のなまなましい

混沌のなかに立ちまじることのおそれとして、プルースト的精神に固有な一つの傾向とも結びつく。なまの現実から離れたところに特権的な視座を設け、精神の自由を保ちながら、現実を無害なものとして自らの統御のもとにおくというのが、プルーストの基本的な姿勢なのだ。これは端的には、小説のあちこちでみられる「のぞき見る」という状況にあらわれ、もっと本質的には、過去へ向かい、一人称を用いるこの小説のあり方自身とも無関係ではない。

このアルベルチヌの眠りが語られる場面が、さきのバルベックへの車中のエピソードと類似点をもつことにも注意を払っておきたい。どちらも自然の粹組のなかで見られ（アルベルチヌはここで、草木であり同時に月明りのバルベックの浜辺だ）、谷間の娘は目覚めて歩いているものの、話者は彼女を一方的に眺めるばかりだ。そしてどちらの場面も、完全な光のなかで展開しているのではないことも何かの意味をもつであろう。女と自然（草木）との重ね合わせから、話者は人間の生命のあり方について二度に及んで貴重な体験をしたことになる。このようにみると、やはりさきに調べた、バルベック近郊の野道を行く女たちの姿も、この体験に到りうる前段階として、あながち無視できない意味をもつともいえよう。

ともあれ、女と植物との重ね合わせがもつ意味は広い。美的なレベルを越えて、人間のあり方にかかわる形而上的な意味をさえおびてくることがわかる。

ここまで来ると、問題は「女」を離れて、人間一般、あるいは芸術創造に及ぶ深さをもつ。実際、小説『失われた時を求めて』を読むと、植物とくに樹木が人間の精神性ないし内面性のシンボルとみられている個所に少なからず出会う。この点は『ジャン・サントゥイユ』の時代も同じであるけれども、このころにくらべて、純化と精神化への傾斜を強めているように感じられる。非概念性のイメージが示すように、世界と人間のあり方につ

いて、一層の自覚が進んだためであろう。たとえば、『ゲルマントの方』の前半あたりで、話者がサン・ルーと連れ立ってパリの郊外の村へ、サン・ルーの恋人ラシェルを訪ねるくだりをみよう。話者はこの村に咲きほこるさくらや梨の木の花にひどく心を打たれ、その美しさが「人間がただ目だけで見るのではなく、心のなかで感じるもののいくらかを私のそばに近づけてくれた」(Ⅱ, 160)と書き、さらにつぎのようにつづける。

「彼ら、黄金時代の思い出を守りつづけるものたち。現実人は人びとが考えるようなものではなく、詩の輝きや無垢のふしぎなきらめきが光を放つことのできる場所であり、私たちが自分にふさわしくあろうとする努力の報いでもある場所なのだ、という約束を保証してくれるものたち。昼寝や魚釣りや読書にもってこいの影を作って、その上に神秘に身をかかめる白い大きな生き物たち。彼らがむしろ天使なのではないだろうか」(Ⅱ, 160-161)

樹木のもつ庇護や精神の高揚というイメージからさらに進んで、それが日常の現実を詩に変える道を示唆するものとみられていることがわかる。樹木はいわば心で見える存在であり、現実根ざすとともに想像や幻覚のなかに位置をもつことも可能なのだ。木々はその無垢と非概念性のゆえに、一つの幻想的な存在でもありうる。そしてそこから、人間がその日常的な生活をのりこえるための、導き手になることもできるのである。

西洋文明に昔からあった樹木についての神秘的な見方を、いくらかプルーストのうちに認めることもできるかもしれない。古代人にとって植物はしばしば人間の形によって見られ、アリストテレスは「樹木は夢想にふける人間だ」といったといわれる⁽⁸⁾。秋の終りのブーローニュの森を描く『スワン家の方へ』末尾の美しい描写で、「一種の接木によって女性との共同生活を強いられてきた」この森の木々は、話者に「森の精ドリュアス、足早に通りすぎる、色彩ゆたかな社交界の婦人」を想起させる(Ⅰ, 424)。このような感じ方は、今引用した個所にもある。話者は、ラシェルの住む

この村の樹木が異国の神々のようだと思い、そんな見方をした自分を、復活したイエスの姿を園丁と見間違えたマグダラのマリアにくらべたりする（Ⅱ，160）。

もっと神秘的な言及としては、プチット・マドレーヌのくだりにあるケルト人の信仰にふれた個所をあげることができ、ここでは死者の霊が低次の生き物にのり移るという考え方が引用される（Ⅰ，44）。プルーストの作品全体の文脈とはそぐわない異教的な発想ではあるけれども、のちにバルベックの三本の木のエピソードで、ある程度再現されるという事実はある。三本の木が送ってよこす秘密をついに解読できなかった話者の目に、それらは、生き返らせてくれと頼む、少年時代の親しい仲間のように映じるのである（Ⅰ，719）⁹⁾。

プルーストの神秘的傾向を論じるのは当面の目的ではないが、小説を通じて、芸術創造へ向かおうとする話者に対して、樹木が何回か語りかけてくるのはやはりみのがせない事実である。失敗に終わりはしたけれど、何かの啓示がバルベック近郊で「樹木」によってもたらされようとしたのがすでに重要であるし、『ソドムとゴモラ』の終り近くには、周囲の木々から励ましを受けるように思うところもある。「これらの道の木々、りんご、ぎよりゅうの木々が私のあとに生きのこるであろうことを思いながら、私には永遠の休息の鐘が鳴らない間に、いよいよ仕事につくようにと、彼らから忠告を受けたように思えるのであった」（Ⅱ，1013）。ずっとのちになると、芸術への道にすっかり絶望してしまった話者の心は、樹木の呼びかけによってももはや動かされることがない。「木々よ」と彼は思う。「おまえたちはもはや私に何も告げるものをもたない。私の冷えきった心は、もうおまえたちの声を聞かない。私はこうして広い自然の真中にいることはいる。でも、この光り輝く頂と暗い幹を分かち線を眺めたところで、心に冷たさと倦怠があるばかりだ」（Ⅲ，855）。芸術への道を彷徨する話者にとって、樹木は黙した道づれ、貴重な秘密をかかえて遠くから励ましを

送る者としての意味をもつのであろう。

『ソドムとゴモラ』の途中、「心の間歇」の終りに、花ざかりのりんごの木のを列を描く、みじかいけれど、あざやかなイメージを結ぶ美しい描写がある（Ⅱ，781）。祖母の死をはじめて痛切に実感したあと、話者がひとりバルベックの近くを歩く場面である。話者の芸術家としての才能を固く信じて疑わなかった祖母への思いが、これらの木々をなおのこと鮮やかに彼の心に焼きつけるのであろう。樹木が庇護の意味をもち励まし手であることを思うと、もしかして、これらのばら色の花を咲き揃わせた樹木の並びに、祖母のイメージが重なっているのかもしれない。概して、この小説の樹木の描写を通じて、哀惜・悔恨の思いが感じられることが多い。孫の大成を見ぬままに逝った祖母に対する話者の心残りとして、それはもしかしてどこかで結びあうところがあるのかもしれない。

樹木のもつ導き手のような役割は、これまでみてきたその非概念性や、それが「幻想」のように現実と非現実のあわいに位置するという事実からくる。これらがそのまま、芸術創造への暗示となりうるのだ。しかし樹木は、もっと端的に人間のあり方そのもののシンボルでもある。『花咲く乙女たち』の終り近くで、友情の虚妄にふれて述べられるつぎの言葉は、この点きわめて重要な意味をもつ。「私たちは外部から石を付け加えていくことのできる建物のような存在ではなく、たとえば樹木であって、自分たち自身の樹液からその幹のつぎの節目、その葉むらの上部の層をひき出していくのだ」（Ⅰ，907）。樹木を人間の（あるいは社会の）理想的な姿のイメージとみなすことは、べつにプルースト独自の見方ではない⁽¹⁰⁾。しかしここには、高さ・上昇・自立・沈黙などのイメージと並んで、さきにルーサンヴィルの森のくだりでみた、個性という観念がみごとに結実しているのを見ることが出来る。このような人間ひとりひとりの、独自の、内からの成長という観念こそ、プルーストの人間観の根幹であり、人間の間の交流の問題として、やがて彼の読書論、芸術論へとつながる重要さをもつ

のである。

植物とくに樹木がこのように純化と精神化のイメージを託して眺められるとしても、一方では、対象が花である場合、エロチックな、濃厚な肉感性をおびて見られることもまたたしかである。この点は今までにも多少みる機会があったけれど、『ソドムとゴモラ』冒頭にある同性愛世界のはじめての発見の場面に、この傾向の突き進んだ形をみることができる。シャルリュス氏とジュピアンの最初の出会いが蘭の花の受粉のイメージで描き出される、唐突だが奇妙に適切な情景である。これ以外にはたとえば、スワンとオデットの間で《faire cattleya》といういいまわしが、二人の間の肉体的な結びつきの合図となること（I, 234）を思い出してもよい。こんなにあからさまではなくても、花と女性を重ね合わす見方そのもののなかに、美しい花のうちにも生殖の営みを認め、人間を植物にひきもどしていくプルーストの柔軟な、あるいは冷酷な目がすでに多少とも前提となっているのである。

純粋なものとエロチックなもの、この二つがいずれも植物の属性となることは、私たちを多少とまどわせはする。この点、Rina Viers という人の記事《Fleurs blanches et sacrilège》⁽¹¹⁾ がことのほか興味ぶかい。彼女は白い花がプルーストにおいて清らかさのシンボルであるとともに瀆聖とも結びつくことを、いくつかの例をあげて論じている。処女性のしるしである百合の花が、小説でもっとも身持のわるい娼婦ラシェルとともに描き出され、ばいかうつぎ（seringa）の花が女同志の愛にかかわりをもつ、などである。つけ加えて、さんざしを例にとることもできよう。「マリアの月」に咲く「カトリック的な小灌木」（I, 140）であるこの花はまた、コンブレの教会堂に飾られて「今日花に変身した昆虫のもつ春の毒液や、相手を刺す力」（I, 114）をたくわえているようだ、と祭壇にははなはだ似つかわしくないイメージを見せる。またたとえば、上にみた樹木についての精神

的な見方が、まさしくラシエルの住む村で行なわれていることも意味深い（この部分にある「硝石の雨で焼かれたような家々」（Ⅱ，161）という比喩はラシエルを念頭においているのであろう）。いかに対立するように思えようと、聖化と瀆聖とは本来同じ性質の力であり、聖化に向かう力は、場合によって同じ強さで逆方向にも転じることができるのであろう。こういった屈折は、たとえばプルースト自身の生涯において、母親に対する感情にもみてとることができるように思う。それにまた、生命の純粹形態とは当然性的なものをふくみうるのであるから、プルーストによって、このようなものとして、生命現象がとらえていたのだと考えてもよい。

ともあれ、私たちがプルーストの人間理解において知ることの一つは、このような二方向に向かうことができるものとしての原初的な生命現象に人間をひきもどそうとする動きである。「同じひとりの人間は、数分間ぐらい調べてみるなら、つぎつぎと人間にも、人間=鳥にも、人間=魚にも、人間=昆虫にもなるものだ」（Ⅱ，606）とプルーストは書く。プルーストの描写の全体を通じて、原生動物・下等動物に比喩を求めることを、その一つの特徴とすることができないだろうか（「あの娘たちという植虫類の芽胞のいくつか」（Ⅰ，855）。同種の例をこの前後からひろえば、Ⅰ，824，Ⅰ，915など）。眠りという点からみれば、人間は低級な動物と何ら選ぶところがないのであり（Ⅰ，5），下等な動物の方がかえって人間のもたない感覚をもつこともある（Ⅱ，364）。プルーストのコスモロジーのなかでは、人間も動物も植物も、共通の要素をふくみながら交流しあい、すべては「生命の根元的な統一性」⁽¹²⁾のなかにとけこむのである。

このような見方がとりわけ意味をもつのは、これを芸術創造の面にひき移した場合である。作品末尾の芸術論のところで、話者は自分のなかで作品が育っていった有様を、胚珠が胚乳のなかで育っていく過程にたとえる（Ⅲ，899）。さきにみた、人間の樹木のような内からの生長というイメージと軌を一にするこのたとえは、ずっと以前の『ソドムとゴモラ』冒頭の

部分にあるつぎの見方と呼応している。「この花たちのあからさまな策略から、私は文学作品の無意識な部分のすべてに及ぶ一つの結論をひき出していた」(Ⅱ, 603)。ここには、もっとも人間的な活動と、もっとも自然な営みとの同一化がみられる。もっとも精神的な働きが、かえってもっとも植物的なものと結びつくのだ。人間の豊かな創造の働きは、むしろ自然のもつ原始的な生命の形にならうことによって望ましい形で展開される、とプルーストはいいたいのであろう。このイメージをさらに進めて、プルーストの小説の展開、あるいは文章の生成に及ぼすことも、もしかして可能かもしれない。

作品の生育が植物になぞらえられるとすれば、作家の亡きあと、作品が生き残る姿もまた植物に似ている。「ヴィクトル・ユーゴーはうたった。「草は茂り、子どもたちは死ななければならない」。私としても、芸術の残酷な法則は、人々が死に、われわれ自身もあらゆる苦しみを汲みつくしたうえで死ぬことだといおう。それは、忘却からではなく、永遠の生命から草木が生い出ずるためであり、豊かな作品というこのたくましい草の上で、あとにつづく幾世代もの人たちが、その下に眠る人たちのことを気にとめずに、楽しく「草上の昼餐」をするためなのだ」(Ⅲ, 1038)。無心に野原を飾る樹木たち、花たちの群は、もしかして亡き芸術家の苦心の結晶なのだ。草木はすぐれて芸術作品であり、この作品を通じて、樹木がしばしば「励まし手」のように話者の目に映じるのも、背後に植物に対するこのような見方があるからかもしれない。

(注)

- (1) プレヤード叢書版 *Les Plaisirs et les jours*, p. 141.
- (2) Jean-Pierre Richard: *Proust et le monde sensible*, p. 51.
- (3) 前掲書 p. 45.
- (4) プレヤード叢書版 *Jean Santeuil*, p. 299.
- (5) Elizabeth Jackson: *L'Evolution de la mémoire involontaire dans l'oeuvre de Marcel Proust*, p. 76.

- (6) Richard の前掲書 p. 94。
- (7) このとき話者の望みが容易にかなえられたかもしれないことについては、ずっとのちにジルベルトの告白として示される (Ⅲ, 697)。また、プルーストの草稿でこのエピソードが何回も言及されることについては、Maurice Bardèche: *Marcel Proust romancier*, I. p. 268.
- (8) ジュリアン・グリーン、マルセル・ジュリアン対談集『終末を前にして』p. 66。
- (9) アンヌ・アンリ女史は、このような感じ方を、基本的にドイツロマン主義の哲学に発する anthropomorphisation あるいは vitalisme に結びつけて解釈する。「一つの限定された物体のなかには、つねに普遍的な自然から発する無限の存在が集められている」というシェリング的な規定が、この背景に認められるからだ (Anne Henry: *Marcel Proust: théories pour une esthétique*, p. 113)。この本はプルースト美学の形成を、十九世紀終りの知的風土のなかで論じた大著であるが、「どんな時代もこれほど樹木を賞揚したことはない」として、モンテスキュー、バレス、クローデルなどを例に、樹木がこのころよく好まれた文学的テーマであることも指摘している。
- (10) 前注のような、アンヌ・アンリ女史が指摘した人たちにつづいて、樹木のイメージを好んだ作家としてサンテグジュペリをあげることができる。*Citadelle* のあちこちに、理想的な共同体としての樹木への言及がみられる。「雑多な草はおたがいに憎しみあい、食べあう。しかし一本の樹木はそうではない。それぞれの枝が、他の枝の繁栄によって生育していく」、「樹木は秩序である」など。
- (11) 雑誌《Europe》のプルースト特集号第2冊 (Février-mars 1971), pp. 183-189.
- (12) Rina Viers: *Evolution et sexualité des plantes dans 《Sodome et Gomorrhe》* 前注の雑誌に収録 (p. 112)。